

こどもの軽微な逸脱と集団の自律性
- 行動と会話の分析を通した集団の構造理解 -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
大木 萌

本研究では、こどもの集団における“逸脱行為”に関わるふるまいと会話を通して，“逸脱行為” 従来の逸脱行動の範疇には入らない軽微な逸脱行動に焦点を当てた検討を行う。この検討を経て、こども集団に準拠するこどもの姿を描き、こども集団の構造を理解することを目的とした。なお、一般的に言われる「逸脱行動」とは区別されている。

本研究は、学童期のこどもを対象とし、フィールドを土曜日の活動の場として開かれている図書室および運動場として行った。フィールドワークを通して収集されたデータを用いて、場の文脈における“逸脱行為”的理解（研究1）と、録音データを主として用いた会話分析による“逸脱行為”に関与するこども 当事者とその周辺の人びとの行動の様相についての考察（研究2）の二段階で構成された。

研究1では、場のこどもたちに観られた行動の全体像を把握するため、参与観察を通じて得られたデータについて、KJ法に準拠し、整理と空間配置を行った。その結果、場は、使用者と利用者、支配的文脈からの逸脱者、場の限界からの“突破”者によって構成されていることが明らかとなった。なかでも場の限界からの“突破”者に関しては、図書室では“逸脱行為”が周囲から確定され、運動場では“逸脱行為”と確定されないままに存在できるという点で、こども集団のなかでの捉えられたの違いが観察された。図書室での介入者が主にスタッフであり運動場ではこどもであること、前者にはおとな目の目があり後者にはないことが影響していると考えられる。結果、スタッフとこどもの間にある社会的支配性、多数のポジション間の支配性が、この起因因子として想定された。

研究2では、研究1において示された、運動場における「こども同士での“逸脱行為”をめぐるやりとり」という側面に着目し、その過程を詳細に分析するために会話分析を行った。その結果、“逸脱行為”的当事者が、“逸脱行為”について他者 ここでは社会的支配性がない存在である他のこどもからの言及を受けた際に、というふるまいの様相が観られた。以上のことから、こどもは、既存の「場」の規範を理解したうえで、その中にこども集団独自の規範を設けており、ここから逸脱しないための交渉を行っているということが明らかになった。

以上の分析を総じて、自由時間におけるこどもの逸脱には、こども自身による場の管理と構成のプロセスの一部であることがわかった。逸脱をめぐるやりとりは、“逸脱行為”を助長するのではなく、こども集団なりの逸脱に関わる制限と境界の画定作業であり、こども集団の自律的な構成プロセスのひとつである。こういった意味合いを可能性として備えておくことが、こどもの逸脱へのあらたなまなざしとなり、異なるアプローチの方略を拓くきっかけとなり得ると考える。